

## 八幡市総合計画審議会 第1部会(第2回) 議事要旨

■日 時：平成 29 年 6 月 1 日（木） 14:00～

■場 所：市役所分庁舎 2階 会議室 A

### ■出席者

#### 【委員】

家村 咲栄 委員、石川 純 委員、沖田 悟傳 委員、奥村 正明 委員、加藤 博史 委員、川原 絵美 委員、木下 重喜 委員、田邊 昭 委員、辻村 修太郎 委員、能瀬 巖 委員、藤田 美代子 委員、古市 久子 委員、松下 順英 委員、八木 英夫 委員、橋本 行史 委員

#### 【事務局】

足立 政策推進部長、曾我 政策推進部次長兼政策推進課長、堀川 政策推進課係長、岡田 政策推進課係長

### ■欠席者

岩成 功 委員、中川 一 委員

### ■次第

1. 開会
2. 協議・報告事項
  - ・[基本目標 2]「子どもが輝く『未来のまち やわた』」について

### ■配布資料

- ・第 2 章 子どもが輝く『未来のまち やわた』 ※施策体系のまとめ
- ・第 2 章 子どもが輝く『未来のまち やわた』(素案)

### ■傍聴者

なし

## 1. 開会

加藤部会長（以下、「部会長」）：前回の部会において、非常に熱心にご議論いただいた。本日は第2章 子どもが輝く「未来のまち やわた」について、皆様方のご意見をいただきたい。よろしくお願いします。

## 2. 協議・報告事項

部会長：それでは基本目標2「子どもが輝く『未来のまち やわた』」について、事務局から資料の説明をお願いしたい。

事務局：（資料説明（第1節））

部会長：第1節についてご意見、ご質問をお願いしたい。

委員：八幡は子育てに力を入れていると感じる。ひとり親家庭にとっても、育てやすい環境の市だと思う。待機児童もいない。人気の園とそうでない園との差が生じている面はあるが、人数が少ない園も工夫しているし、まわりの方々にもよくしていただいている。

部会長：もっとその辺りは自慢しても良いのではないか。八幡は良いところであるということ、子育てに力を入れているということを、アピールしてほしい。母親の孤立や母親同士のサポートについてはどうか。

委員：すくすくの杜は欽明台にあり、行ってみたいと思っても、車がないと行きにくい、という面はある。市役所周辺にも施設があった方が、みんなが行きやすいのではないか。

委員：子育て支援センター（すくすくの杜）の利用者が多いのは良いことだが、どこから来られているか、ということを知りたい。誰もが利用できる環境整備が重要。バスがあるが、バスのルートにも限りがある。

福祉部：すくすくの杜については、国道1号が壁のようになっていて、1号線より北の地域からの利用は少ないのが現状である。すくすくの杜は2年前にオープンした最新の施設だが、子育て支援センターは4中学校区のうち3校区にはある。こちらは、地元の方が積極的に利用されている。

委員：情報がすみずみまで行きわたっていないのではないか。情報の発信方法の工夫をしてほしい。親が事実とは違った昔の情報や、テレビから得た情報に振り回されているのでは良くない。すくすくの杜ほど立派なものはいくつも建てることはできないが、もっと小さなものでも、地区のすぐ近くに、集う・遊ぶ機能が必要。幼稚園・保育園に気軽におしゃべりできるスペースや相談スペースなどの機能を持たせてはどうか。

委員：保育園でもあいあいポケットなど、様々なことをされている。私もそれに救われたことがある。母親が孤立することなく、情報を共有できる。だが、それが

知られていない。「こんなことをしていますよ」という、発信がうまくできていない。アピールが下手だと思う。

委員 : 教育関係で仕事をしている。枚方から 44 年前に越してきたが、その当時から、八幡市は保育行政がたいへん進んでいるという評判だった。それが引っ越してきた動機でもある。保育園にお世話になったが、5 歳児の生活発表会のレベルがとても高く驚いたということがあった。長いセリフを表情豊かに生き生きと発表していて、小学生に勝てるのではとったりした。今は幼保一元化という流れになっているが、保育園における教育レベルについて、八幡市は昔から高かったと思う。待機児童ゼロが維持できていることは素晴らしいと思うが、隠れ待機児童はいないのか。八幡市でも保育園児の数が増え、幼稚園児の数は減っている。本当は働きたいけれど預けられないというような人はいるのではないか。

福祉部 : 4 月の入所で申込書を出していただいた方には、どこかの施設には入っていただけている。年齢によって特定の園に集中することがあるが、その場合はヒアリングしながら調整して、第一希望を変えていただくことで、入っていただけるようにしている。年度途中入所についても、様々な工夫をしながら、待機児童ゼロとしている。

部会長 : 待機児童ゼロを維持しているのは素晴らしいこと、維持するのは大変な努力が必要だと思うがぜひとも続けてほしい。また、保育・教育のクオリティが高いというのも重要。就学前は教育しなくていい、ということは全くない。モンテッソーリという学者は敏感期にタイミングよく教育すると全然違う、と言っている。クオリティについても発信してもらいたい。各幼稚園・保育園の機能充実でサポートできれば身近でいいと思う。

委員 : 八幡市はもっと質の高い教育を目指せると思っている。小さい時から家庭やその他で言葉を交わし、対話力を上げていくことが重要。先生が子どもと対話する能力を上げるために、先生に対する研修を行ってほしい。以前、哲学的思考を引き出す絵本というのを各園に置いていただいた。その絵本を各施設の入り口に並べて、絵本を通じて対話という癖をつけるようにして、「賢い」子を育てる。学力だけでなく、人としての賢さを育てられることを目標としたお金の使い方をしてほしい。

委員 : 環境市民ネットの活動で、年に 1 回、環境の紙芝居をして幼稚園・保育園を回っている。多少退屈する子もいるが、みな熱心に聞いてくれる。次の年に行くと「地球レンジャーがきた！」と子ども達が喜んでくれている。普通のカリキュラムだけでなく、先生方が花や野菜を育ててくださっており、子ども達にも栽培を体験させる、こういうことも大切にしてほしい。情報発信について、保育園・幼稚園や小学校など、学校に入ると横のつながりができて情報交換がで

きるが、その年代に達するまでの親の横のつながりをどうするか、という問題があると思う。地域によって差もある。教員の人事異動を含め、長期的な目で教育体制を充実させてほしい。近所の集会所でお母さんたちのサークル活動もされているが、なかなか知られていない。もっと情報がいきわたる仕組みを考えてほしい。

部会長 : 親同士のつながり・育て合い、愚痴を言い合うだけでも助けられたりする。そこから情報交換がされ、子育てに対して前向きになる力も生まれてくる。親のサークルを支援していく、という視点を重視していただきたい。

委員 : 待機児童ゼロに突然なったわけではないのではないのか。何を頑張ったからゼロが実現したのか、何が改善点としてあるのか、ということがあるのであれば、しっかり示してほしい。また、市からの情報発信をしてほしい、ということだが、市民からも情報を投げかける、というキャッチボールができるようになれば良いと思う。

部会長 : こんにちは赤ちゃん事業で訪問するのは保健師か。訪問したときに虐待や発達障害が疑われる場合、どのような情報共有のネットワークができていますか。そういった情報も共有していきたいので、また情報提供いただきたい。定期的な訪問相談などは行っているか。

健康部 : こんにちは赤ちゃん事業の訪問は保健師が行っている。里帰り出産される方や訪問を拒否される方もおり、訪問率は100%には至っていない。相談事業については、申し出や電話等での依頼があれば、その都度訪問させていただいている。

部会長 : 民生児童委員が虐待を疑うこともあると思うが、その場合どういった対応になるのか。

委員 : そういった場合、民生児童委員は市へ通報している。

健康部 : そのような連絡があった場合は、連携システム（学校、保健師等）の中で情報を集めて、調査をし、重篤なケースは児童相談所に通報している。突然訪問して拒否されると関係が結べなくなるので、そこは慎重に行っている。ただ緊急を要する場合は躊躇なく速やかに児童相談所につないでいる。

部会長 : 孤立する家庭は増えてきている。孤立していると親にストレスが溜まり、子どもにあたるケースがある。事例を踏まえて、どういったネットワークを充実させていくべきか、地域力とどうつなげていくか、これからの課題がクリアになれば出してもらいたい。母親だけで子育てができるわけがない。昔は近所のおばさん、おじさんが色々口を出して、多くの人に育てられて子どもは成長していたが、現在はそういうものをもう少し意図的に作る必要がある。どの市だったか記憶が定かではないが、「里ばあちゃん」という制度を設けている市がある。退職された教員や保母さんをお願いして子育て応援団になってもらうものである。子どもの貧困はこの節になるかと思うが、子どもの貧困は親の貧困で

あり、貧困の連鎖を断たなくてはならない。どうサポートしていくかが重要。

委員 : 児童虐待は具体的にはどのような内容の類で増えているのかお聞きしたい。

健康部 : 具体的な数字は資料がないため、この場ではお伝えできないが、八幡市の場合、ちょっとしたことで連絡・通報していただくようにしていただいている。最近では、面前 DV といって、父親が母親に対して子どもの前で暴力をふるう、それも子どもに対する虐待と捉えている。また、ひとり親家庭の母親に新しい夫ができて、その新しい父親から、虐待に至るというケースも多いと感じている。

部会長 : 大正時代に賀川豊彦が子どもの権利の中に「夫婦喧嘩をやめてもらう権利」ということを言っている。子どもの前で夫婦げんかするのは DV だということである。面前 DV の防止を市として啓発することも大切。

委員 : どんなことでも報告、ということだが、迷うことはある。

委員 : 山城教育局では京都市以南の山城南部の市町村を所管している。山城南部では、公立幼稚園のない市や、保育園・私立幼稚園の人数は増えているのに公立幼稚園の人数は減っている市などある中で、八幡市はバランスよく、子育てしやすい施策をされていると思う。保育園と幼稚園は本来所管が異なるが、部署間の連携が良いのではないか。教育の立場から話を聞く機会はあるが、行政としてこういった形でされているのかお聞きしたい。

福祉部 : 八幡市では保育・幼稚園課が教育部と福祉部の併任辞令を受け、教育と福祉にまたがる業務をしている。部署として一つになっているので、保育園・幼稚園・認定子ども園の就学前施設を一元的に管理でき、事務の連携は取りやすい。

委員 : 女性相談に来られる方の相談の中には、子どもが関連しているケースも多い。中には命に係わる DV ですぐに避難が必要な状態の方もおられる。女性相談と児童虐待の連携は取れているか。

健康部 : 女性相談の中で DV 被害者の方に子どもがいる場合は、必ず連携して支援を行っている。

(休憩)

部会長 : 再開する。事務局から第 2 節の資料の説明をお願いしたい

事務局 : (資料説明 (第 2 節))

部会長 : 自由にご意見をお願いしたい。

委員 : 保育園も幼稚園に負けず劣らず教育レベルがとも上がっている。ただ、小学校になると、不登校や発達障害の子どもへの対応により、授業の質の低下や学力が低い原因にもなっているのではないか。そのため、先生のケアや先生の質を上げていくということも必要ではないかと感じている。

放課後学習クラブの参加率や増加傾向は、どのように調査されているのか。辞めていく子どもも多い。周知についても、地域によって差があるのではないか。

委員 : 教員の質の問題は永遠の課題。時代によって教育に求めるものは変わっていく。それに応えられる指導力のある教師、指導力をつけるのが課題。教員も人間なので、良い個性を活かしながら指導にあたってほしいという思いはある。

八幡市は人口7万人台の小さな市だが、地域による差は確かにある。市内全体としてどうか、という論議を地域の違いを踏まえながらしている。小中学校の学力が低い、学校が荒れている、という見方をされることも多いが、市内の小中学校は、もう少し以前は問題があるところもあったが、ここ2・3年は落ち着いている。学校教育の課題は学力向上。学力向上を何の指標ではかるのか、となると1番分かりやすいのは全国学力調査になる。指標は京都府平均にしているが、京都府は全国平均よりかなり高いので、この目標を達成するのはなかなか難しい。小学校は全国平均に対して、A(基礎)は若干上回っている。B(応用)になると若干下回っている。京都府の平均値と比べると、両方とも低くなる。中学校は残念ながらAもBも全国平均値に届いていない。平均値だけでみると非常に辛い。学力の高い子・低い子の分布状態を見ると、低い子が比較的多い。学力下位層をどう引き上げるかが課題で、それには学習状況を改善する必要がある。学校で学習したことを復習することが非常に大切。放課後学習クラブに入っているのは市内の5・6年生の4分の1。「家で宿題してきなさい」と言って翌日集めて点検するだけでは不十分。放課後にどれだけ学習するか、その辺りの家庭環境を考える必要がある。学力調査の目標が未達成であることに対し、学習指導員等の確保が十分にできていないことが課題に挙げられているが、課題はこれだけではない。学校によっては様々な方法で工夫しながら授業をしている。学習指導員等の大人を一人増やせば、どの場も対応できる良い環境になると思うが、予算的にはなかなか難しい。

委員 : 関連情報のデータで、小学校は全国学力状況調査で中学校は京都府の学力診断テスト、指標は全国学力調査となると、データの統一性がない。どちらを使うのか。めざす姿で『生きる力』が備わっています」というが、これは国(文部科学省)が言っているそのままのイメージで使っているのか。八幡市のオリジナルで、こんな子どもを育てたい、という創意感があってもいいのではないか。

事務局 : 八幡市で育ったから身に着けられるものがあるのかを含め、ご意見をいただきながらめざす姿を検討できればと思う。

委員 : 生きる力は人間関係力だと思う。大学生を見ていると、周りを見ながら自分を活かす、ダメだったら考え直す、というところが弱い。そういった部分は今後、社会に出た時にも、しっかりした人を育てる根本だと思う。学力については、非常に苦労されたと思う。十数年前に八幡市が「5点アップ」を目標にしたと

きは学力が向上した。数字が目の前にあると、しんどい部分はあるが、現場はどうしたらいいか考え、頑張る。それも、先生方の知恵や生きる力だと思う。

委員 : 「生きる力」の言葉から「ないところから何か作り出す」ことが大切になるのではないか。私自身、研究者、公務員、設計などさまざまな仕事をしながら生計を立てている。専門家が考える生きる力と、子育て中の親、社会に出たばかりの若者、それぞれにとっての生きる力を、対話を通じ考えていけたらよい。

部会長 : オリジナルな文言を考えた方が良いかもしれない。人間関係力やクリエイティブな力、相手の痛みを分かることからいくとイメージーションが大事になってくる。夢と志についても、もう少し練り上げる必要がある。

委員 : 私の長男は障害を持っており、学校でも色々と対応をしてもらったが、ハワイ旅行をした際に良い体験があった。杖をついてバスに乗った際に、席を譲ってもらったのだが、運転手からは杖があるのが見えなかったらしく、「子どもは立て」と言われた。そのとき他の乗客が「この子はハンディキャップがあるから」と声を揃えて言ってくれた。日本では電車に乗っても、意外と席を譲ってもらえない。学力も大事だが、ハワイで体験したような社会になってほしい。

委員 : 健全育成の観点で、各中学校・高校を回って薬物乱用防止や犯罪に手を染めないように、小さい時から善悪の区別をつける非行防止活動に力を入れている。全校生徒が受講できるよう、教育委員会と協力して活動しており、今後も継続したい。

部会長 : 多世代交流・異世代交流の指摘もあったが、物事を広く見たり深く見たりするために、老人力を子育てに活かす、ということも考えられる。力を抜く力、ゆったり育てるということも大事かと思う。未来の八幡市を担う市民を育てる、ということで重要な章になる。

委員 : 子どもの生きる力の育成、というのはとても力強い表現。人間関係は社会に出てからも学べるので、まずはしっかり子どもは勉強すべきだと思う。勉強は学校、人間形成は家庭だと思う。高齢化が進んでいるが、子どもの教育も大事だが、元気な高齢者も多いので、高齢者の力をもっと地域に活かせないかと思う。

部会長 : 本日いただいたご意見は、事務局で整理していただきたい。他にも意見があれば意見シートに書いて事務局にお寄せいただきたい。次回3回目は7月6日(木)14時30分から、今日と同じ場所で行う。お忙しいとは思いますが、よろしくお願ひしたい。この場がひとつの勉強会のようになっており、よりよい計画にしていきたいと思う。本日は貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

以上